

日本フィルハーモニー交響楽団

第6回 ヨーロッパ公演報告書



©山口 敦

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

6th EUROPE TOUR 2019 REPORT

人、音楽、自然——日本フィルのテーマです。



—創立指揮者 渡邊暁雄 —





JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

6th EUROPE TOUR 2019 REPORT

ごあいさつ

13年ぶりの日本フィルヨーロッパ公演、フィンランド・オーストリア・ドイツ・英国の4か国10公演。自信と大きな成果を得て終えることができましたことをご報告申し上げます。

財政的に苦しい日本フィルがこの公演を完遂できましたのは、ひとえに皆様の熱いご支援の賜物であり、心より御礼申し上げます。

厳しい日程ではありましたが、楽団員が持てる力を最大限発揮し、日本フィルならではの演奏を各国の皆様にお届けできましたこと、そして、高い評価をいただいたことは楽団員全員にとって貴重な経験となりました。将来への財産として、大きな自信を得ることができたと確信しております。

今回はフィンランドが一つのポイントでした。外交関係樹立100周年、創立指揮者渡邊暁雄生誕100年の年に、フィンランド出身である首席指揮者ピエタリ・インキネンと初のフィンランド訪問を成し遂げました。

そしてウィーン・ムジークフェラインでの演奏、ドイツ中堅都市・ロンドン・リーズ・エдинバラを廻り、各地で高い評価を得ることができました。特にウィーン、ロンドンでの好評は日頃の蓄積の成果が頭れたものと思っています。また、ヨーロッパの演奏環境、クラシック音楽の根づいた生活の豊かさも併せ実感することもできました。

各公演会場のロビーでは東北の被災地での活動や現状をお知らせするパネル展示と資料配布をし、理解していただくと共に、インキネンの故郷コウヴォラでは音楽を学ぶ子供たち対象に、日本フィルならではの音楽ワークショップを実施し、翌朝の地元の新聞で一面を飾るなど多くの方々に共感をいただきました。

ヨーロッパでの音楽を通じた文化交流で得たものをこれから演奏・音楽活動に充分に生かし、芸術性と社会性を兼ね備えた楽団として一層成長していきたいと思っています。

最終日、エдинバラでのカーテンコールの中、感謝の気持ちで胸が熱くなったことを思い出しつつ、改めて皆様の温かいお心に御礼を申し上げる次第です。

理事長 平井 俊邦

公演日程

2019年 4月

| | | | |
|----|---|-----|---|
| 2日 | ヘルシンキ(フィンランド) Musiikkitalo 【Program A】 | 8日 | ウィーン(オーストリア) Wiener Musikverein 【Program D】 |
| 3日 | コウヴォラ(フィンランド) Kuusankoskitalo 【Program A】 | 9日 | フルト(ドイツ) Theater Fürth 【Program C】 |
| 5日 | ヴィルヘルムスハーフェン(ドイツ) Stadthalle 【Program B】 | 12日 | ロンドン(英国) Cadogan Hall 【Program D】 |
| 6日 | ヴォルフスブルク(ドイツ) Theater Wolfsburg 【Program B】 | 13日 | リーズ(英国) Town Hall 【Program D】 |
| 7日 | レーゲンスブルク(ドイツ) Audimax 【Program B】 | 14日 | エдинバラ(英国) Usher Hall 【Program C】* |

主なプログラム

指揮:ピエタリ・インキネン
[日本フィル首席指揮者]
ピアノ:ジョナサン・ビス
ピアノ:ジョン・リル*
チェロ:シェク・カネー=メイソン

4/2ヘルシンキ公演と4/3コウヴォラ公演は日本フィルオフィシャルYouTubeチャンネルにてライブ配信いたしました。
(映像製作:テレビマンユニオン)

【Program A】
武満徹:弦楽のためのレクイエム
エルガー:チェロ協奏曲
シベリウス:交響曲第2番
※ヘルシンキのみ冒頭にフィンランディア

【Program C】
ラウタヴァーラ:In the Beginning
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第3番
武満徹:弦楽のためのレクイエム
シベリウス:交響曲第2番

【Program B】
ラウタヴァーラ:In the Beginning
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第3番
チャイコフスキイ:交響曲第4番

【Program D】
ラウタヴァーラ:In the Beginning
エルガー:チェロ協奏曲
武満徹:弦楽のためのレクイエム
シベリウス:交響曲第2番

「インキネン時代の日本フィル」、ヨーロッパ4か国10都市に大きな足跡

©山口 敦

池田 卓夫 音楽ジャーナリスト@いけたく本舗

1)概要

日本フィルハーモニー交響楽団は2019年4月1日から16日の間に10都市を回る第6回ヨーロッパ公演をフィンランド人首席指揮者、ピエタリ・インキネンとともに行った。2019年に日本とフィンランドの外交関係樹立100周年、日本フィル創立指揮者でフィンランド人を母に持つ渡邊曉雄の生誕100周年が重なる千載一遇の機会をとらえたものだ。ウィーンでは日本とオーストリアの友好150周年も兼ね、英国3か所の公演はラグビー・ワールドカップ日本大会から東京オリンピック、パラリンピックへの橋渡しを担う「日英文化季間」の参加プログラムに組み入れられていた。オーケストラ外交の典型ながら、意外にも、日本フィルが渡邊の国フィンランドで公演するのは初めてだった。

2)旅程とプログラム

ツアーは①首都ヘルシンキとインキネンの出身地コウヴォラからなるフィンランド編、②ドイツ・ニーダーザクセン州ヴィルヘルムスハーフェンとヴォルフスブルク、バイエルン州レーゲンスブルクとフルト、オーストリアの首都ウィーンからなるドイツ語圏編、③ロンドン、リーズ、エдинバラの英国編----の3パートに分かれていた。

プログラムはメインの交響曲にシベリウスの第2番、チャイコフ斯基の第4番、協奏曲に英国出身の20歳の新鋭シェク・カネー=メイソン独奏のエルガー「チェロ協奏曲」、ドイツ編が中堅のジョナサン・ビス、英国編がベテランのジョン・リルとソリストが入れ替わるベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」、日本・フィンランドの交流を象徴し、時にアンコールへと回る管弦楽曲にシベリウスの「交響詩《フィンランディア》」「悲しきワルツ」、インキネンが世界初演したラウタヴァーラの遺作「In the Beginning」、武満徹「弦楽のためのレクイエム」。組み合わせを変えて「A」から「D」の4種を用意した。オーケストラと指揮者の力量を正直に示し、音楽を通じた文化交流の意義を問う素晴らしいメニューであり、ツアーの進行とともに、演奏水準を着実に切り上げていった。

すべての公演会場のロビーには、東日本大震災(2011年)の被災地で日本フィル楽団員が200回以上も地道に続けてきた音楽による支援、教育などの活動を紹介するパネルを展示した。開演前は事務局員が立ち会い、現地の聴衆の熱心な質問に対応。人と音楽、自然との触れ合いを大切にする楽団の姿勢は、演奏以外の場面にもあらわれていた。

3)フィンランド

豊田泰久氏が音響設計を手がけ、2011年に開場したヘルシンキ音楽センター(1,700席)での初日(4月2日)はリハーサル時間が極端に短かつたこともあり、演奏の完成度よりは熱気で乗り切った。ヘルシンキで初めて落ち合ったカネー=メイソンとインキネン、日本フィルだが、いとも易々と楽器を操りながらも技が表に出ず、つねに人肌の温もりを感じさせるチェリストの歌心は管弦楽全体に即、なじんだ。インキネンは音の出し方、感情のベクトルの方向性などでフィンランドのオーケストラと全く異なる持ち味の日本フィルの特色をフルに生かし、マッチョでヴィルトゥオージティの高いシベリウスを試みた。あまりのテンションにヘルシンキでは演奏に傷も出たが、翌日のコウヴォラからはベースをつかみ、大成功を収めた。指揮者の出身地ということもあり、ツアー中ただ1回のアウトリーチブ

ログラムもファシリテーターのトロンボーン奏者、伊波睦と弦楽四重奏、日本=フィンランド語通訳の規模で実施。80人近い子どもが集まつた。



4)ドイツ&オーストリア

ドイツ語圏ではカネー=メイソンのウィーン・デビューを兼ねたムジークフェライン(楽友協会)大ホール公演(8日)を除き、ピアノのビスがドイツ国内4か所で共演した。フルト市立劇場だけがベーゼンドルファー、他3か所はスタインウェイだったが、それぞれの楽器の音色やタッチの軽重はかなり異なった。ビスはそれぞれの特色に即し、「ベートーヴェンのハ短調」を掘り下げる、同じ調性のモーツアルト「ピアノ協奏曲第24番」から受けた影響の部分を徹底して強調する、2人の作曲家の根底に流れるウィーン古典派の様式感を前面に出す…といったギアチェンジを巧みに行い、興味深かつた。





ここまでパートのハイライトが、ウィーン公演だったことに疑いの余地はない。ツアー中の4月4日に20歳を迎えたばかりのカネー＝メイソンは、ウィーン・デビューに特段緊張する様子もなく、いつも通りに心のこもった音楽を奏でた。ただムジークフェラインの芳醇な音響と彼の暖色系のチェロの音色の相性が予想外に悪く、管弦楽に吸われがちになってしまったのは気の毒だった。

しかしながら、真のセンセーションはプログラムの最後に置かれたシベリウスの『交響曲第2番』。ゲネプロでホールの音響特性に合わせた微調整を入念に行ったのが奏功、出だしの柔らかく軽やかな響きに魅了されたのも束の間、ヘルシンキでインキンネンが仕掛けた「マッショナシベリウス」の実験がついに、予想を超えた成果を発揮はじめた。フレーズのエッジを明確に打ち出した後はムジークフェラインの音響に身を委ね、弱音を起点とした音楽を息の長いフレージングでじっくりと積み上げ、衝撃的な最強音の爆発へと導いていく。今回のツアーではソロ・コンサートマスターの木野雅之、扇谷泰朋、ソロ・チェリストの菊地知也、辻本玲とトップ2人がつねにそろって舞台に乗り、万全の態勢で臨んでいる。特にチェロセクションの音の厚みはアンサンブル全体のかなめとして機能しており、ヴィオラとコントラバスの音の輝きにも貢献するところが大きかった。

アンコールではさらに、「悲しきワルツ」「交響詩《フィンランディア》」とシベリウス2曲が奏でられ、聴衆の興奮はピークに達した。もちろん、ブラヴォーも盛大に。演奏に参加した全員が「ウィーンの成功」ではなく「音楽への奉仕」の思いで溶け合い、シベリウスのメッセージを余すところなく伝えた。インキンネンと日本フィルが深く嗜み合い、ついに「渡邊曉雄のシベリウス」の呪縛から解き放たれた記念すべき一夜となった。

5)危機管理

ウィーンで「出し切った」反動からか、楽団員2人、ステージスタッフ1人が「B型インフルエンザに感染」と診断された。ペスト禍以来、感染症に敏感なオーストリア政府の規制に従い、3人はツアーを離脱して治癒までの間、ウィーン滞在を余儀なくされた。残りのメンバーは翌日、ドイツへ戻りニュルンベルク近郊のフルトに入った。市立劇場に着くと、救急車とパトカーの物々しい出迎えを受けた。ウィーンからの連絡が大げさに伝わり、日本フィル一行は危うく「パンデミック(感染症)集団」と認定されるところだったが、誤解はすぐに解け、公演は予定通り行われた。ソリストのビスはフルトが最後。ドイツで唯一のシベリウスの交響曲も成

功裏に奏でられた。今後の課題として、90人近い規模で2週間単位の長いツアーを行う場合、「医師か看護師を同行させるべきではないか」といった声も、楽団員からは上がっていた。

6)英国

ロンドンとリーズはチェロのカネー＝メイソンの人気で売り切れ。若い聴衆も多かった。蓋を開ければチェロの内省的なソロに負けず劣らず、あるいはそれ以上に、インキンネンと日本フィルのシベリウスに人々は熱狂した。ロンドンからリーズまでは5時間のバス移動。そのままゲネプロ、本番をこなしてリーズには泊まらず、再びバス5時間の移動で北上、スコットランドの首都エдинバラのホテルにチェックインした時刻は、午前3時30分だった。日曜日で、アッシャーホールの公演はマチネ。しかもベートーヴェンの協奏曲のソリストが東京での凱旋定期と同じジョン・リルに替わるためゲネプロも必要と、過酷なスケジュールだったが、リルの絶妙な現場感覚と氣遣いで最短時間の打ち合わせに終わった。本番はツアー中最高の出来栄えとなり、リルの独奏も味わい深い。現地メディアにも良い批評が出た。ツアー全体を通じ「日本のオーケストラ」に対する偏見を述べた論評は一切なく、「世界水準のアンサンブル」「管楽器の奏者の名人芸」など、すべて肯定的だった。参加者全員、寝不足も忘れて深夜まで、勝利の美酒に酔った。



名産のスコッチ・iskyをインキンネンと酌み交わしながら、コンサートマスターの扇谷が「これ、ブログに書いてね」と前置きして私に漏らした言葉、「僕たち、今夜でマエストロと本当の友だちになれた」は、楽団員全員が共有する思いだろう。

今から半世紀前の1969年、渡邊はマンチェスターのBBC(英国放送協会)ノーザン交響楽団(現在のBBCフィルハーモニック)の英国内ツアーの指揮を任されて当時25歳、チャイコフスキーキャンプコンクールに優勝する1年前のリルをソリストに従え、リーズのヴィクトリアホールやエディンバラのアッシャーホールなどを回っていた。英國シベリウス協会の説明によると、渡邊は「7曲あるシベリウスの交響曲の中で最も解釈が難しいとされる第6番のスペシャリストで、英国内ほとんどのメジャー・オーケストラを制覇した」という。当然、ロンドンにも客演歴が残っている。最初は誰も気づかなかつた。日本フィル第6回ヨーロッパ公演の英国パートは期せずして、偉大な創立指揮者の足跡をたどる旅だったのだ。これで、渡邊誕生100周年のミッションの方も無事完結した。

7)私的な結論

だが、これからは続くベートーヴェンやドヴォルジャークの交響曲シリーズなどを通じ、インキンネンと現役世代の若い楽員たちが21世紀半ばにかけての新しい日本フィルの文化を築いていく場面である。ツアーで限界を突破した演奏水準を維持しつつ評価と集客力を高め、次のツアーやレコーディングも実現させてほしいと、同行記者は切に願った。



第6回 ヨーロッパ公演

寄付者ご芳名

(50音順・敬称略)

| | | | | | |
|-------------|------------|---------|-----------------------------------|-----------------|-------------|
| 相澤 岩子 | 大藤 裕康 | 窪田 美貴子 | 田口 知子 | 西村 醇子 | 松丸 良子 |
| 相澤 光江 | 大牟田日本フィルの会 | 倉橋 寿子 | 武田 幸子 | 日本フィルハーモニー協会合唱団 | 松本 美香 |
| 青木 隆 | 大力 横子 | 栗山 昌子 | 武田 正一郎 | 根本 直之 | 松山 幸世 |
| 青山 均 | 岡田 光好 | 小泉 清子 | 橋 寛 | 根本 保子 | 丸山 勝芳 |
| 秋間 実 | 岡松 哲 | 小出 昭夫 | 橋 正義 | 野中 和行 | 三浦 紗子 |
| 秋山 千恵子 | 岡村 佐致子 | 甲賀 一宏 | 田中 公裕 | 萩谷 日出子 | 三浦 康男 |
| 浅野 純次 | 小川 史人 | 香村 章夫 | 田中 実 | 萩原 しのぶ | 三重野 勝俊 |
| 浅見昭子税理士事務所 | 小笠原 悟 | 古賀 容子 | 田辺 佐喜江 | 橋本 充 | 三木 繁光 |
| 厚 敏子 | 沖 武重 | 胡口 靖夫 | 谷 浩二 | 畠井 馨 | 三角 純容 |
| 厚田 理郎 | 奥野 吉矩 | 小島 光晴 | 谷崎 幸雄 | 畠中 紀美代 | 篠島 洋一 |
| 阿部 俊彰 | 奥林 群司 | 小手川 励人 | 田村 浩章 | 鉢呂 沙織 | 三松 直人 |
| 安部 雅雄 | 尾崎 恒一 | 後藤 範章 | 知野 隆二 | 服部 訓子 | 宮崎 健一・のり子 |
| 雨谷 世喜子 | 小田倉 正 | 小宮 葦 | 桐村 光彦 | 馬場 國昭 | 宮本 直彦 |
| 新井 恭子 | 小田 敏雄 | 小山 清 | 辻田 文也 | 早川 明男 | 武蔵野合唱団 |
| 荒時 康一郎 | 小野寺 けい子 | 是枝 洋 | 土屋 幸三 | 針谷 博史 | 武藤 千代子 |
| 飯田 恵司 | 小野寺 健一 | 坂本 博志 | 常岡 靖夫 | 春口 和子 | 村上 幸恵 |
| 池上 義春 | 小畑 教子 | 佐川 真美 | 常川 さゆり | 菱村 都巳 | 村上 覚 |
| 池田 博 | 小畑 秀正 | 佐藤 正知 | 常田 稔雄 | 平手 文康 | 村上 純子 |
| 池谷 光司 | 小原 磯則 | 座間 淑美 | 恒吉 政人 | 平野 新太郎 | 村上 豊 |
| 石井 里枝 | 尾曲 義雄 | 澤田 直隆 | 釣木 純一郎 | 平林 直哉 | 村田 孝子 |
| 石井 静子 | 織地 俊幸 | 澤畠 篤 | d SCHOOL "わかりやすい オーケストラ" 参加者一同 | 広嶋 清志 | 村野 祥子 |
| 石井 将 | 折田 正樹 | 宍戸 秀行 | d 日本フィルの会 | 樋渡 宏寿 | 室蘭日本フィルを聴く会 |
| 石毛 和子 | 筧 美和子 | 四戸 孝紀 | 手島 洋 | フィンランド公演 | 望月 廣一 |
| 石澤 卓志 | 柏木 明 | 清水 真人 | 株式会社 | 応援ツアーパートナー一同 | 元永 徹司 |
| 石塚 邦雄 | 柏川 健一 | 清水 賢 | 照国計算センター代表 | 医療法人深川皮膚科 | 森 宏之 |
| 伊藤 圭子 | 加藤 壱康 | 下河辺 美知子 | 取締役 塩倉 宏 | 理事長 深川 宗男 | 矢倉 俊紀 |
| 今村 富美枝 | 加藤 隆一 | 下條 英敏 | 深沢 茂実 | 八代 元行 | |
| 岩田 邦勝 | 金井 奈保子 | 生島 貴司 | 東郷 悅子 | 深津 輝雄 | 柳澤 敏子 |
| 岩田 達明 | 金本 順子 | 白柳 和男 | 藤堂 実代子 | 福澤 嘉乃 | 柳田 瞳子 |
| 岩本 晴子 | 金子 昌男 | 菅沼 曜子 | 外川 チエ子 | 福田 昭夫 | 柳田 淑 |
| 上菌 重治 | 鎌田 好子 | 杉浦 禮子 | 富田 節子 | 藤井 厚裕・美和子 | 矢野 和代 |
| 上野 悅子・陽子 | 上條 貞夫 | 杉本 功 | 外山 雄三 | 藤井 典子 | 矢野 留美子 |
| 上野 由幾恵 | 上條 淑子 | 鈴木 薫 | 豊田 美知江 | 藤岡 幸夫 | 山上 典彦 |
| 上原 英治 | 香山 和子 | 鈴木 重行 | 鳥海 京子 | 藤田 一紀 | 山口 達之 |
| 植村 允勝 | 河北 恵美 | 鈴木 新一 | 直井 哲郎 | 藤平 直士 | 山崎 貢 |
| 上本 展裕 | 河北 博文 | 鈴木 智恵子 | 長岡 彰 | 藤村 文二 | 油井 直次 |
| 鵜飼 力 | 河津 郷子 | 鈴木 弘美 | 中尾 純子 | 藤本 和子 | 横瀬 浩 |
| 宇田川 とも子 | 河野 祐子 | 鈴木 靖子 | 中尾 昌弘 | 古川 博味 | 吉川 美保 |
| 内野 和博 | 川畑 雅義 | 住江 慶子 | 中島 美知子 | 古瀬 明弘 | 吉田 美江子 |
| 海野 尚久 | 河原 詳次 | 隅 修三 | 永田 健一 | 保坂 瞳子 | 吉田 洋一 |
| 江口 真佐子 | 河村 フクエ | 妹尾 絲子 | 永田 康 | 星 昇次郎 | 吉中 博 |
| 榎本 靖 | 河原 佑子 | 宗 神子 | 永野 琢夫 | 星野 弘明 | 吉野 恭博 |
| 税理士法人エルビーエー | 菅野 博仁 | 田浦 宏己 | 中村 彰 | 細野 幸子 | 吉羽 治 |
| 遠藤 滋 | 菊池 和美 | 高井 延幸 | 中村 茂子 | 堀野 定雄 | 呂 道子 |
| 大石 修 | 菊池 陽子 | 高木 洋 | 医療法人 中村医院 | 本田 健三 | 若林 とも子 |
| 大内 栄和 | 北川 幹夫 | 高木 宏忠 | 中村 晉 | 本田 博 | 脇 拓也 |
| 大久保 昇 | 喜多 崇介 | 高田 信子 | 中山 佳也 | 前田 正明 | 渡辺 和子 |
| 大黒 寛 | 北村 篤嗣 | 高田 昌樹 | 梨木 信彦 | 眞方 律子 | 渡辺 定義 |
| 大澤 基宏 | 北村 真 | 高津 正徳 | 並河 東志夫 | 牧野 正博 | 渡辺 進 |
| 大島 剛 | 北村 裕 | 高橋 充 | 並河 俊子 | 眞塩 陽一郎 | 渡辺 宏 |
| 太田 孝子 | 木野 恵以子 | 高原 伸夫 | 納谷 晋一 | 増島 葉子 | 渡辺 和 |
| 太田 喜雄 | 清宮・生山法律事務所 | 高柳 和子 | 難波 卓人 | 増田 達治 | |
| 大坪 賢二 | 辯護士 清宮 國義 | 高山 榮子 | 南部 玲子 | 松井 光由 | |
| 大友 公子 | 久保田 恵子 | 滝田 政之 | 新野 泰秀 | 松岡 恭子 | |
| 大原 武 | 久保田 伸一 | 多久島 昇 | 西 恵美子 | 松田 勝次 | |

他会場等でも、たくさんの皆様よりご寄付をいただきました。



第6回 ヨーロッパ公演

助成団体・企業御芳名

今回のヨーロッパ公演につきまして、以下の団体・企業の皆様より助成金ならびにご寄付をいただきました。ご支援ご協力に心より感謝いたします。

(50音順・敬称略)

【助成】



文化庁文化芸術振興費補助金
(国際芸術交流支援事業)

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人朝日新聞文化財団

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

一般社団法人東京俱楽部

三菱UFJ信託芸術文化財団

The Scandinavia-Japan Sasakawa Foundation

4/2、3(フィンランド公演)



4/12、13、14(英国公演)

FINNAIR

MUFG 三菱UFJニコス株式会社



JAPAN AIRLINES

鹿島
KAJIMA CORPORATION

【寄付】

アイング株式会社

株式会社アドービジネスコンサルタント

株式会社泉商会

株式会社内田洋行

宇部興産株式会社

エレコム株式会社

株式会社大場造園

株式会社岡三証券グループ

株式会社カナック企画

株式会社グロッセリー

株式会社興建社

株式会社コバヤシ

コンパッソ税理士法人

昭和電工株式会社

株式会社センゾー

大栄不動産株式会社

株式会社泰秀

株式会社千代田テクノル

株式会社東北新社

トーターエンジニアリング株式会社

株式会社永谷園ホールディングス

中津興産株式会社

ナクソス・ジャパン株式会社

日本技術貿易株式会社

日本電子株式会社

根本特殊化学株式会社

株式会社ノジマ

ハウス食品グループ本社株式会社

ハナマルキ株式会社

非破壊検査株式会社

富国生命保険相互会社

一般財団法人藤本育英財団

丸美屋食品工業株式会社

三菱ガス化学株式会社

三菱地所株式会社

武蔵商事株式会社

株式会社村田製作所

ユウキフーツシステム株式会社

横河電機株式会社

米持建設株式会社

株式会社リンレイ

株式会社LEOC

【後援】



在フィンランド日本国大使館
(4/2,3フィンランド公演)



日本オーストリア友好150周年
(4/8ウィーン公演)



在オーストリア日本国大使館
(4/8ウィーン公演)



日英文化季間
(4/12,13,14英國公演)